被爆の記憶 僕らが継承

広島の平和ガイドに／核廃絶へ署名活動

2015 ヒロシマ ナガサキ

観光客に原爆ドームの説明をする村上正晃さん＝広島市中区

平和の尊さを伝えるボランティアガイドや、核廃絶に向けて署名活動を展開する高校生たち。広島では原爆の記憶や核兵器廃絶への願いが、10代、20代の若者へと脈々と受け継がれている。

平和記念公園（広島市中区）の原爆ドーム前。村上正晃さん(22)はこの夏、平和ガイドとして同ドームや慰霊碑などを観光客に案内している。広島修道大在学中の昨年春、英語力を磨きたいと外国人観光客が多い同公園に通い始めた。

その時知ったのが現在所属するボランティア団体。「広島市に生まれ育ちながら、原爆について自分の無知さを思い知った」。少しずつ勉強を重ね、今年1月に研修生としてデビューして以来、約3千人を案内した。

今年3月に大学を卒業。日中はガイド、夜はアルバイトの生活を続けている。「戦争や被爆を知らない自分にガイドの資格があるのか葛藤もある」と複雑な心情をのぞかせながらも、「平和について同世代に考えてもらえるようなガイドを目指したい」と話す。

原爆ドームから約100メートル離れた元安橋では、核兵器廃絶の署名活動を続ける広島女学院高の生徒たちの姿があった。同高の署名実行委員会のメンバーたちだ。

2008年から始まった署名は、7年間で35万6千人以上が集まった。友人に誘われて実行委に参加した3年の石原香音（かのん）さん(18)は「活動を通じて核兵器の危険性を知ることができた」という。

「署名活動の時、被爆者の方に声を掛けてもらうのが1番の励み」と石原さん。現在は引退し、1、2年15人が土曜日午後に平和記念公園などの街頭で署名を募っている。

同市で26～28日に開かれる国連軍縮会議で、活動を報告する署名実行委員会の徳山実紘（ひろ）さん(18)は「大役でプレッシャーもあるが、被爆者の『二度と原爆による被害者を出したくない』という思いを代弁したい」と意気込んでいる。

（西島宏美）